

1:なぜ今、このテーマを博多阪急で仕掛けようと思ったのですか？

2015年、福岡で初めてのアートフェア「AFAF」を立ち上げたことで、私は世界の「ART」と、日本で親しまれてきた「アート」の間に、大きな隔りがあることに気づきました。

日本でカタカナの「アート」として語られてきたものの多くは、暮らしを彩る“装飾”として消費されてきました。もちろんそれ自体は豊かな文化です。しかし、世界で語られる「ART」とは少し違います。「ART」には作家の思想や時代性、歴史、批評性があり、さらにマーケットの中で価値が検証され、共有されながら文化資産として育っていく構造があります。

私はその現場を見たとき、「作品の価値とは、誰が決めるのか」「なぜ世界ではARTが社会的価値として成立しているのか」という問いを強く持つようになりました。

けれど、それは単なる知識や投資の話ではありません。世界中の人々が、なぜそこまでARTに熱狂し、人生を賭け、価値を信じて関わり続けるのか。その“本当の面白さ”に触れる入口なのだと思います。

日本では、まだ健全なアートマーケットの土壌が十分に育っているとは言えません。だからこそ博多阪急という場所から、「ARTとは何か」を改めて考え、議論し、価値観を更新していくきっかけをつくりたかった。この展覧会は、その最初の一步だと考えています。

これまで、私のような小さなギャラリーは、おそらく人口の1%にも満たない、美意識の高い人々によって支えられてきました。しかし、百貨店のように公共性の高い場では、アートに初めて触れる人々とも向き合わなければなりません。

私は、今こそこうした広いステージで、限られた愛好家だけでなく、より多くの人々に「真のART」の面白さや価値を伝えていくべき時期だと確信しています。

ARTを一部の人だけの教養や嗜好品として閉じ込めるのではなく、社会の共通言語として開いていきたいと願っています。